

第 75 回 大 会
キ リ ス ト 教 史 学 会
研 究 発 表 要 旨 集

日 時

2024 年 9 月 13 日 (金) • 14 日 (土)

会 場

金城学院大学

および

日本キリスト教団名古屋中央教会

第 75 回大会

キリスト教史学会

日時：2024 年 9 月 13 日（金）・9 月 14 日（土）

会場：金城学院大学 および 日本キリスト教団名古屋中央教会



金城学院大学へのアクセス

名鉄瀬戸線「大森・金城学院前」駅から徒歩 4~5 分

大森・金城学院前駅の交差点からゆるやかな坂道を上る。正門を入り、20mほど先の右手にあるエスカレーターを上る。案内に従い少し歩くと会場の E1 棟。



日本キリスト教団名古屋中央教会へのアクセス

地下鉄／名鉄線「栄」駅下車、5 番出口のすぐ前

- ※ 第一日目は受付（9:30~10:00）を済ませてから会場にお入りください。
- ※ 研究発表は 25 分、質疑応答は 5 分です。時間厳守でお願いします。
- ※ プログラムに変更が生じることがあります。

第1日目 (9月13日) 金城学院大学 E1 棟

9:30-	受付開始		
10:00-10:25	(第1会場) E1 棟102		開会式
	挨拶	司会： 専務理事 小川早百合 理事長 小樽山ルイ 金城学院大学学長 小室尚子 金城学院大学 松谷暉介	開催校より歓迎の言葉 オリエンテーション
	研究発表		
10:30-11:00	1 金井重彦 聖書翻訳と漢字、漢文	(第1会場) E1 棟102 司会 狹間芳樹 (大谷大学)	(第2会場) E1 棟103 司会 久松英二 (龍谷大学) 4 伊勢田奈緒 オスマン帝国占領下におけるハンガリー宗教改革者セゲディの働きについての一考察
11:05-11:35	2 服部直美 植木枝盛の「天」とキリスト教	(東京大学大学院)	5 石川雄一 (上智大学) パドヴァ大学におけるチューダー朝期英國人国民団と対抗宗教改革—レジナルド・ポールを中心に—
11:40-12:10	3 岸野久 イエズス会インド副管区長G・バルゼウ宛F・ザビエルの最終 メッセージ	(第1会場) E1 棟102	総会
12:10-13:30	(学食及び第1会場)	写真撮影及び昼食	
13:30-14:25	(第1会場) E1 棟102	シンポジウム 「大東亜共栄圏とキリスト教—戦時期東アジア地域における教会合同運動」	
14:30-17:30	(第1会場) E1 棟102	司会 松谷暉介 (金城学院大学) 「富田満をめぐる諸課題」 落合建仁 (金城学院大学) 「満洲基督教会（一九四二）」 渡辺祐子 (東北学院大学) 「華北中華基督教団（一九四二）」 宋軍(香港・中国神学研究院) 「南京中華基督教団（一九四三）」 松谷暉介 (金城学院大学) 「日本基督教台湾教団（一九四四）」 高井ヘラー由紀 (台湾・台南神学院) 「日本基督教朝鮮教団（一九四五）」 李元重 (同志社大学) 「戦後の日本基督教団の戦争責任問題（一九四五～）」 川口葉子 (立教大学・東京基督教大学)	
17:45-20:00	(学食)	懇親会	

第2日目 (9月14日) 日本キリスト教団・名古屋中央教会

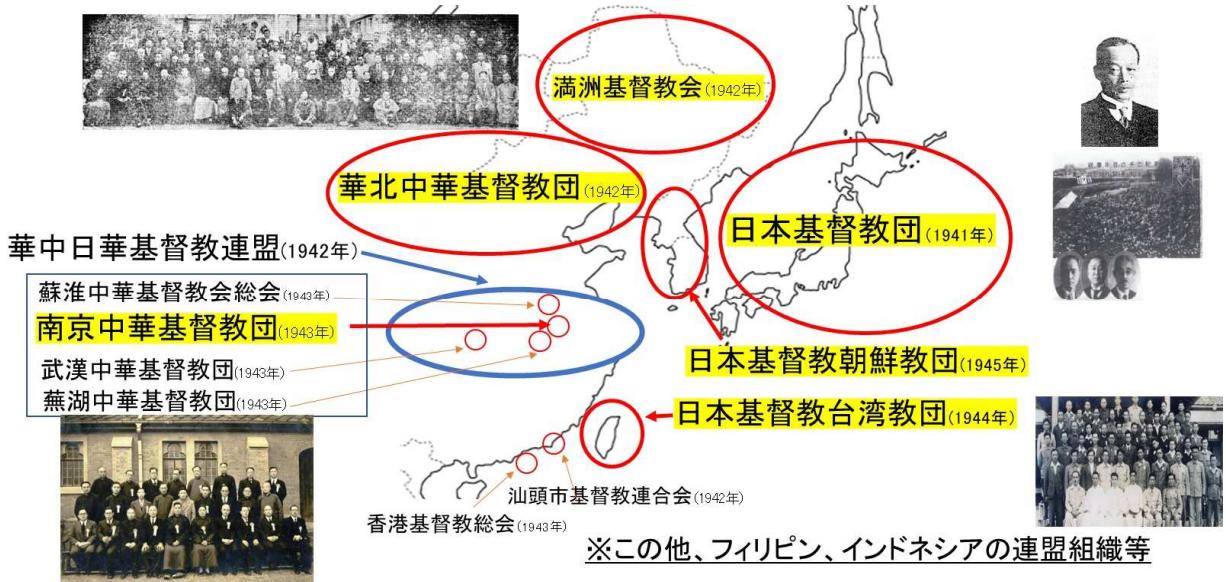
9:00-	受付開始		
	研究発表		
(第1会場) 礼拝堂	司会 渡辺祐子 (東北学院大学)	(第2会場) 集会室	司会 小樽山ルイ (フェリス女学院大学)
9:30-10:00	6 阿部伊作 カンバーランド長老教会の紀州伝道と信徒伝道者大石余平について	（東京基督教大学）	10 金田俊郎 （福岡女学院看護大学） ファシズム体制下のプロテスタント教会—ワールド福音教会の動向を中心に—
10:05-10:35	7 雲然祥子 「大正デモクラシー」と「戦後民主主義」をつなぐ人々—鈴木義男と三淵忠彦、片山哲ら—	(岩手県立大学)	11 鮎 哲誠 (同志社大学大学院) アメリカン・ボード対日宣教の「始まり」を再考する—カントン・ミッションの「実践」と「頓挫」—
(第1会場) 礼拝堂	司会 三好千春 (南山大学)	(第2会場) 集会室	司会 辻直人 (和光大学)
10:40-11:10	8 宮崎善信 メリノール宣教会 (Catholic Foreign Mission Society of America) の日本宣教とカトリック京都知牧区 (Prefecture Apostolic of Kyoto) の設立について	(長崎外国语大学)	12 山崎あすか (清泉女子大学大学院) 19世紀に消滅した正統的キリスト教靈性における正統的グノーシスの確認—現行日本の「教育の目的」を「人格の完成」とした田中耕太郎の「完成した人格は、「神の類像」である」の意味を追って
11:15-11:45	9 川上直哉 布施辰治のキリスト教：1939年を中心に	(仙台白百合女子大学)	13 原真由美 (関東学院大学) ヒンチマンの平和思想—アメリカ・キリスト教宣教師 (バブテスト) の活動から
11:45-13:30	昼食		
13:30-15:30	(第1会場) 礼拝堂	公開講演	※金城学院大学キリスト教文化研究所共催 司会 落合健仁 (金城学院大学) 新井浩文氏 (埼玉県立文書館学芸主幹、国立公文書館認証アーキビスト) 「教会資料を守り伝える—キリスト教・地域社会・アーカイブズ」
15:30-15:45	(第1会場) 礼拝堂	閉会式	司会 会務理事 渡辺祐子

2024年 キリスト教史学会 シンポジウム 大東亜共栄圏とキリスト教—戦時期東アジア地域における教会合同運動

今回、会場校である金城学院大学の所在する愛知県は富田満（1883-1961）の出身地であり、彼は同学院理事長を15年（1946-61）にわたり務めた。彼が日本基督教団の統理を務めた人物であることは周知の通りだが、戦争協力をしたことに対する厳しい評価が見られるものの、史料的制約の問題もあり、本格的研究は未だ十分になされてこなかったといえよう。

その一方で、日本基督教団の成立に関する優れたいくつもの先行研究がなされ、本学会においても第65回大会（2014年）において「宗教団体法」を主題とするシンポジウムが開催され、本学会としても良き学術成果を挙げることができた。また、当時の「大東亜共栄圏」各地に結成された諸々の「教団」（あるいは類似の合同教会）については、2000年以降、ようやく個別の本格的学術研究が見られるようになったものの、日本とアジアの諸教団を総合的に検討する比較研究はなされてこなかった。そもそもキリスト教界における「教団」はプロテスタントに限らずカトリックの「日本天主公教教団」も存在し、また東南アジアの日本軍政下のフィリピンやインドネシアでも教会合同が推し進められた歴史があるなど、この領域の比較研究をするとなると、かなり本格的かつ広範囲の共同研究が必要となってくるはずである。

そうしたことを念頭に置きつつも、本シンポジウムでは主に東アジア地域に焦点を当て、富田満研究の空白状況があることを問題意識として持ちつつ、日本基督教団と大東亜共栄圏の諸々の「教団」とは何であったのか、またそれらが各地域の教会の戦後から今日に至るまでの歩みにどのような影響を及ぼしてきたのか、さらには未解明の今後の研究課題が何であるのか等を総合的に議論したい。



・シンポジスト：

落合建仁
渡辺祐子
宋軍
松谷曇介
高井ヘラー由紀
李元重
川口葉子

富田満をめぐる諸課題
満洲基督教會 (1942年)
華北中華基督教團・ (1942年)
南京中華基督教團 (1943年)
日本基督教台灣教團 (1944年)
日本基督教朝鮮教團 (1945年)
戦後 (1945～) の日本基督教團の戦争責任問題

富田満をめぐる諸課題

落合建仁（金城学院大学）

日本基督教団の統理者として知られる富田満（1883-1961）は、戦時下の神社参拝の容認、伊勢神宮参拝、いわゆる大東亜戦争への協力（たとえば「日本基督教団より大東亜共栄圏にある基督教徒に送る書翰」[1944年3月26日]は彼の名前によって送られた）など、教団責任者として行ってきたことが戦後厳しい批判にさらされることとなった。しかし、それらについての弁明もほとんど行わなかったとされる。

そのような富田満であるが、その思想や論理、行動について、広く史資料に基づいて精緻に検討・分析することは、これまで十分になされてきたとは言い難い。その理由は種々あげられうるが、一理由としては史料的制約があるからと思われる。本発表では、富田満に関わる史資料の最近の状況について焦点を絞ってお伝えし、今後の本格的な富田満研究の起点とすることができるれば幸いである。

満洲基督教会（1942年）

渡辺祐子（東北学院大学）

1860年代の終わりから始まった中国東北部（満洲）のキリスト教（プロテstant）伝道は、スコットランド教会とアイルランド長老教会を中心に展開し、その後他教派も参入して、1932年に「満洲国」が成立したころには、朝鮮族の教会も含めて20弱の教派教会が存在していた（そのうちスコットランドとアイルランドの両長老教会、およびデンマーク・ルーテル教会に属す教会は、1927年に正式に設立された中華基督教会に合流）。

「満洲国」政府は、これらの教会に対し、中華民国との関係の遮断を要求することから始まって、徐々に圧力を強めていった。1934年からは、中国人牧師の日本視察がはじまり、日中全面戦争開始後は、プロテstant教会の合同が要請されるようになる。日本基督教団が成立するはるか以前から、「満洲国」のプロテstant教会の合同は当局主導で画策されていたといえる。

1941年6月に成立した日本基督教団は、満洲にも支部を置き、支部長には日本基督新京教会牧師の石川四郎が就いた。以後、石川を中心に「満洲国」の教会合同が推し進められ、1942年7月に合同教会の設置が決定した。最終的には「満洲国」の15の教派教会が加わり、1943年10月に第1回総会が開催された。この会議の議場で石川が「満洲基督教会」の成立を宣言しているが、1942年の設置決定と同時に中国人教会の事務所が閉鎖されており、實際にはこの年から合同教会としての運営が始まっていたということができる。

「満洲国」の教会合同は、他の地域には見られない「独立国」ならではの特徴がある。シンポジウムの報告では、この点にも触れながら、教会合同の過程を追ってゆきたい。

華北中華基督教団（1942年）

宋軍（香港・中国神学研究院）

日本占領下における華北地域の諸教会の合同として、1942年4月、華北基督教連合促進会が発足、間もなく同年10月、華北中華基督教団が成立、総会本部は北京市内に置かれた。そして、当時の傀儡政権「華北政務委員会」の統治範囲にあった河北省、河南省、山東省、山西省4省、北京市、天津市、青島市という三つの特別市においてそれぞれ7分会、さらに各分会の下に「道」という地域ごとの27区会が結成され、併せて34分会・区会になった。統計によると、同教団の下に49教派に属する858教会が登録、同教団には牧師684名、伝道師408名、信徒92,176名が在籍であった。

先行研究を踏まえて、これまで明らかにしてきたことをまとめると次のとおりである。

- ①. 華北占領地域に対する宗教政策は北支那方面軍主導と華北政務委員会の「代理人」としての政策実行担当、そしてその宗教政策が占領地域の安定を目指す思想戦に位置付けられること。
- ②. 華北中華基督教団成立過程と青島市分会の活動実態によって、同教団がある程度の宗教的自由空間（グレーゾーン）存在のこと。
- ③. 同教団の主要な構成教派だった衛理公会（メソヂスト教会、会督（監督）江長川）が従来の組織形態を維持していたこと。
- ④. 王明道の北京基督徒会堂、教団加入拒否が成功したこと。

今後の研究課題として、興亜院華北連絡部、東亜伝道会、中華民国新民会等の組織が同教団との関係、または同教団の関連人物、分会・区会、構成教派に関するより詳細に実証研究が待たれる。それから、華北ないし華南など各地の教会合同の違い、中国共産党主導の基督教「三自爱国運動」との比較検討することも今後研究すべき課題の一つである。

南京中華基督教団（1943年）

松谷暉介（金城学院大学）

華中地域の日本軍占領地域（傀儡政権の統治地域）では、1939年に組織された「中支宗教大同聯盟」（本部は上海）が、①日本から進出してくる諸宗教団体の統制、②占領地の中宗教団体の統制、③日本と中国の宗教団体の協力組織結成などの宗教政策を推し進めた。キリスト教に関しては、太平洋戦争勃発後、欧米キリスト教宣教団体の影響が削がれた後に、華中の占領地域の各都市に「日華基督教聯盟」が結成され、こうした各都市の日華基督

教聯盟組織を母体として、中国教会の合同が推進され、1943 年に日本から小崎道雄が教会合同を指導するために中国にやってきたのを契機に、各地に都市レベルの中華基督教団が結成された。

南京の場合、1942 年 3 月に従来からの「南京基督教協進会」に代わって「南京日華基督教聯盟」が組織され、翌年 43 年 2 月 28 日に、南京市内 23 の教会によって「南京中華基督教団」が組織され、楊紹誠がその理事長、鮑忠（中華基督教会・漢中堂牧師）が副理事長、黒田四郎と阿部義宗が顧問となった。

南京日華基督教聯盟と南京中華基督教団は表裏一体の状況で並存し、日本人教会と中国人教会の合同のクリスマス音楽礼拝、合同聖餐式、また賀川豊彦や小崎道雄などの来訪の際の講演会、また「完遂大東亜解放祈祷会」なども開催された。

楊紹誠が南京の中国人教会の代表格として担ぎ上げられたの、彼が元より同じ教派の日本人キリスト者と交流があり、南京特務機関が親日派と見なしていたためだった。当時、対日協力は漢奸と批判されるリスクがあったわけだが、楊紹誠は教会を守るため、また敵国とは言え同じキリスト教信仰を持つ黒田四郎などの日本人牧師たちと信頼関係を築いていたためと思われる。また南京中華基督教団の場合、華北中華基督教団と同様に表向きは教派を解散した合同教会という形式をとってはいたが、たとえば中華基督教会に所属していた複数教会は、上海の中華基督教会の臨時本部とも連絡を取りながら独自の枠組みを維持し、独自の機関紙も発行し続けた。つまり南京中華基督教団は、単なる傀儡組織なわけではなく、日本当局に従うそぶりを見せつつ、中国教会を守るための保護傘の役割を果たしていたとも言える。

日本基督教台灣教団（1944 年）

高井ヘラー由紀（台湾・台南神学院）

1. 日本植民地統治期の台湾キリスト教

近代台湾のキリスト教宣教の開始は、カトリックが 1859 年、プロテstantが 1865 年である。1895 年、台湾は日本にとって最初の植民地となり、50 年の統治期間中に 40 近く日本人教会が建てられた。

2. 日本人キリスト教徒と台湾キリスト教徒の関係

日本人教会は統治初期には台湾教会との合同や台湾人と共同のキリスト教活動を構想したが、統治者と被統治者の思惑のすれ違い、また言語や文化の違いから、これは実現しなかった。

3. 軍国主義を背景とする台湾教会による日本教会との合同の画策

1930 年代、軍國主義の台頭に伴い、危機感を持った台湾基督長老教会は、日本基督教連盟への加盟や日本基督教会との提携あるいは合同の可能性を探ったが、いずれも実現しなかった。1941 年に日本基督教団が成立すると、同教団への加入を希望したが、これも叶えられなかった。

4. 「日本基督教台湾教団」成立とその問題性

1944 年、日本人教会の主導で、日本人教会と台湾長老教会の事実上の合同である「日本基督教台湾教団」が成立した。台北日本基督教会牧師で日本基督教団台湾教区長でもあった上與二郎がキーパーソンであった。しかし、日本人教会は日本基督教団にも属していたため、「二重教籍」問題が発生した。この「台湾教団」は台湾人教会を守るために合併させられたとの印象が強く、合同に協力した北部台湾教会との温度差もあり、後々まで否定的感情を残した。

5. 教団の解散

1945 年 10 月 2 日、「台湾教団」統理であった上與二郎は台湾教会の要求に応えて同教団を正式に解散した。

日本基督教朝鮮教団（1945 年）

李元重（同志社大学）

植民地朝鮮における教会合同運動の始まりは、1938 年 5 月に結成した「朝鮮基督教連合会」である。連合会は京城をはじめ、朝鮮の各地域に支部を結成したが、それを構成したのは朝鮮の各教派教会の指導者と在朝鮮人日本人キリスト者であった。連合会が掲げた目的は、内鮮の一致、宣教師との関係断絶、日本のキリスト教の推進、戦争協力など朝鮮総督府の支配政策に協力するものだった。

日本基督教団の成立と日本の真珠湾攻撃は、植民地朝鮮における諸教派教会の合同と戦争協力を促した。しかし、各教会の立場の違いで、教会合同は円滑に進まなかった。1943 年 4 月に基督教朝鮮監理教団と朝鮮イエス教長老会の一部の指導者たちによって、「日本基督教朝鮮革新教団」の設立を試みたが、わずか 1 か月後解散を余儀なくされた。これを機にして、1943 年 5 月朝鮮イエス教長老会と日本基督教団朝鮮教区との合同によって「日本基督教朝鮮長老教団」が成立した。長老教会以外の朝鮮の諸プロテスタント教会はこの合同には参加せず、同年 10 月基督教朝鮮監理教団は、「日本基督教朝鮮監理教団」という名称変更にとどまった。

1944 年 6 月遠藤柳作が総督府の政務総監に着任してから、教会合同の圧力を加えた。彼

は諸教派の指導者を招集し、教会の完全合同という当局の方針を明確にした。一方で元在日朝鮮基督教会大阪東成教会の牧師全仁善を招き、朝鮮の諸プロテスタント教会が合同できる責務を与えたと考えられる。その結果、1945年7月、諸プロテスタント教会が完全に合同した「日本基督教朝鮮教団」が成立した。ところで、合同の実体化を行われる前に日本が敗戦を迎えたのはいうまでもない。

日本の敗戦後、せっかくの合同を維持しようとする動きもあった。「日本基督教朝鮮教団」は、解放後「朝鮮基督教団」と名称を変更し、9月に第1回「朝鮮基督教南部大会」を開催しようとしたが失敗で終わり、11月にやっと第1回大会の開催ができた。しかし、すでに各地では従来の教派の再建運動が始まっていた。翌年4月に第2回朝鮮基督教南部大会を開催したが、各教派の再建によって、解体された。

戦後（1945～）の日本基督教団の戦争責任問題

川口葉子（立教大学・東京基督教大学）

日本基督教団は、今回のシンポジウムで取り上げる諸教団のなかで、戦後唯一存続した教団である。日本基督教団が敗戦を経てなお存続したこと、そして、戦争の経験が戦後教団のなかでどのように扱われたのか、その二点に注目し、①教団の存続、②戦争責任の問題として考えてみたい。

1941年の日本基督教団の合同は、宗教団体法が規定する教団としての成立であった。宗教団体法が廃止されてなお教団が存続し得たのは、教団幹部たちにとって、合同が政府の圧力ではなく、自分たちの意向によるものと認識していたことが大きい。教団は、戦時体制から戦後の新体制へと転換し、統理者制から会議制へ、「大東亜共栄圏」の地域と教会は、ほとんど手続きなく教団から消失する。

1960年代の教団で浮上した戦争責任の問題、そして生み出された「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」（通称「戦争責任告白」）は、アジア諸国や沖縄との関係を深めることになった一方、1960年代の教団の路線から生じたものであり、戦時下教団の歴史的事実を明らかにすることから出発したものではなかった。その結果、教団は合同の問題、そして戦時下の教会をめぐって紛糾し、戦時下の教会の問題は信仰的規範によって語られるものとなり、戦時下教会の「正しさ」を生み出していくことになる。

日本基督教団は戦時下に成立した教団として、戦争の経験をうちに抱えながら、戦後の歩みへと進んでいく。戦後新体制へと踏み出した教団で、戦争が再び思い起こされていくとき、教団はそれによって揺らいでいくことになったのである。

公開講演会（共催：金城学院大学キリスト教文化研究所他）
「教会資料を守り伝える　—キリスト教・地域社会・アーカイブズ」

新井浩文

はじめに　—教会アーカイブズとは？—

日本の各地域には、設立 150 年近くの歴史を持つ教会も少なくない。こうした古い歴史を持つ教会の中には、設立当初からの教会資料が残されているケースも見られる。筆者は、かつてそうした教会の資料や記録を残すためのノウハウについて共著『教会アーカイブズ入門』（以下『入門』）で紹介したことがある。

その中でも触れたが、教会資料は、①教会独自で保管体制を取っている所は意外に少なく、個人の信徒が保管していることが多い、②記録媒体としての教会資料は、紙資料だけでなく、フロッピーディスクや、録音テープ、ビデオテープ等多種多様であること、③それらの保存環境が決して十分な環境下にある訳ではなく、整備が必要なこと、といった特徴があることを述べた。こうして調査・保存された資料はそれぞれの教会における『教会史』を作成する上で欠くことのできない資料となることは言うまでもない。

1. 地域資料としての教会アーカイブズ

その一方で、教会に残された資料は、教会だけでなく教会が所在している地域の資料としても重要な役割を持っていることを忘れてはならない。内容的には、「信徒名簿」や「教会日誌」といったものが主体となるが、こうした教会史料は、一教会の歴史を物語るだけでなく、広く地域の歴史を物語るアーカイブズでもある。教会アーカイブズは、それぞれの地域においてキリスト教がどのような活動をしてきたかを現在に伝えるデータで、例えば明治初期のキリスト教会が地域の社会福祉事業や学校の設立に大きな貢献を果たしてことはよく知られている。

また、自治体史の編さんが行われる中で、地域の宗教として寺院や神社の歴史が取り上げられることはごく自然だが、九州や北海道といったキリスト教徒が多い地域に比べて、全国的にみて他の自治体では、地元の教会の歴史が取り上げられているケースは極めて稀といってよいだろう。小稿では、その一例として筆者が居住する埼玉県宮代町の日本基督教団和戸教会を取り上げた『宮代町史』の事例を紹介したい。

2. 埼玉県内最初のプロテスタント教会—宮代町和戸教会—

明治初期のキリスト教伝道活動の余波を受けて、埼玉県内で最初に設立された教会が、埼玉県南埼玉郡宮代町のプロテスタント和戸教会である。明治 11 年（1878）のことであった。その設立に関わったのは、当時和戸村の養蚕業を営んでいた小島九右衛門らである。小島九右衛門は、輸出用蚕卵紙販売のために横浜に出たが、胸を病み、ヘボンの施療院にて治療を受けるうちにキリスト教と出会い、やがてバラを紹介されて明治 8 年（1875）6 月、横浜海岸教会にてバラから受洗した。九右衛門は、同年秋、漢訳聖書を携えて帰郷し、郷里にて伝道を開始した。九右衛門をヘボンやバラに紹介したのは、後に和戸教会設立の際に信徒とし

て九右衛門とともに尽力した和戸村の医師篠原大同である（明治 13 年 3 月 26 日付『七一雑報』）。大同は、後述するように、和戸村の医師として教会における医療伝道を中心に明治初期の地方医療にも貢献したが、彼の医学上の師は「平文先生」こと横浜施療院のヘボンであった。彼が明治 8 年 5 月、ヘボンとバラのことを告げたことが前述したように九右衛門キリスト教入信の契機とされている。また、和戸教会設立には、もう一人重要な人物が関わっていた。それは、九右衛門を頼って横浜に赴いた同村の大工、小菅幸之助である。幸之助は、求職のために同郷の九右衛門を頼って横浜に出たが、そこで九右衛門からキリスト教について学び、深く感銘を受けた。明治 9 年（1876）5 月 28 日、幸之助は九右衛門と同じくバラから受洗、同年 10 月に帰郷し、九右衛門とともに伝道を開始するとともに、バラが牧師を勤める横浜海岸教会の執事職にも就いた。一方、幸之助は大工としての腕を發揮して、多くの教会堂建設を手がけている。彼がその建築に関わったものの中には、横浜海岸教会・指路教会のほか、群馬県の沼田教会や横浜のフェリス女学校も含まれており、近代教会建築の基礎を築いた点でも評価されている。

3. 自治体史編さんにおける教会史

次に和戸教会のアーカイブズから、地域との関わりを『宮代町史』を中心にみてみたい。現在、和戸教会の資料は、明治期のアーカイブズである「和戸教会資料」（古文書及び書籍類 92 点）を中心に書棚や説教講壇、窓枠（部分）が、平成 30 年（2018）に町有形文化財（歴史資料）に指定されている。その契機となるのが『宮代町史』による和戸教会の調査であった。

和戸教会を訪れた宣教師の中心的人物はバラであり、彼は先の小島九右衛門や小菅幸之助といった和戸教会設立に深く関与した両名に洗礼を受けただけにとどまらず、教会設立後もこれを陰に陽に支え、大正 8 年（1919）に帰国するまでの間、たびたび和戸教会を訪れては講義を行っている。教会資料の「明治二七年 人名簿」には、そのバラから洗礼を受けたとする多くの信徒の名前が見える。信徒の受洗年齢も、20 歳代が最も多く、30 歳代がこれに次いでおり、青年・壮年層が半数を超えている。バラの力なくして和戸教会の草創期の活動は成しえなかつたことだろう。その背景には、この地域の西洋文化に対する受容性の高さがうかがえるとともに、彼らの疑問に十分答えられるだけの内容をもった当時第一線で活躍していた外国人宣教師らによる講義（説教）が伝道活動に大いに活きていたと思われる。

また、和戸教会において医療伝道を行った篠原大同による地域医療に関する資料として「篠原大同施療人名簿」がある。彼は明治 23 年（1890）の一年間だけでも 1148 人の患者を施療しているが、これはヘボンが横浜施療院で行っていた活動の地方版であり、まさしくヘボンの意志を受け継ぐ活動であった。西洋医学による治療がまだ珍しかった当時にあって、先進的な医療施術が受けられた和戸地域の人々は地方に於ける近代的医療普及の点からも恵まれた地域であったといえるだろう。数値的には施療を受けた人々が信徒となる率は低かったようであるが、医療を通した伝道活動が和戸教会において実施された事実は社会事業としても高く評価されるべきだろう。なお、ヘボンが篠原大同に伝授したとされる「ヘボン膏」の現物が近年確認された。「ヘボン膏」は「商標 HEP BURN PAST A 方名和戸の膏薬」として商品化されて、昭和初年まで広く関東全域で販売されていたこ

とが同膏薬の広告等から知ることができる。

このように地域の視点から、教会の歴史を自治体史に取り上げた事例を『宮代町史』から紹介したが、近代史を語る上で、地方教会の活動は地域自由民との関りからも欠かせないのであり、その中で教会アーカイブズは重要な地域史料として大いに活用されるところとなっている。『町史』刊行の成果が、後に先の「和戸教会資料」として町指定文化財となる評価にもつながったのである。今後は各地でこうした教会アーカイブズの掘起こしが行われ、自治体史や文化財として取り上げる機会が増えることに期待したい。と同時に、各教会でもアーカイブズに関する関心が高まり、その整理と利用が進められることを切に望む次第である。

4. 教会アーカイブズをどのように収集・管理したらよいのか

ではこうした教会アーカイブズ掘り起こしのため、その基本となる資料は、どこに保管されているのだろうか？多くは、事務担当者が執務している事務室等に保管されていることだろう。ただし、過去のすべての教会資料が事務室のロッカー等に年次別にきちんと保管されているというケースはきわめて稀かもしれない。教会の中には、教会組織の中に「文書管理規程」等が設けられており、将来にわたって残すべき必要な書類（「信徒名簿」等）を定めているところもあるかもしれないが、大半は当該年度か古くても2、3年前までの資料を残し、それ以前は廃棄してしまっているケースが多いのではなかろうか？

また、近年は、ハードディスクやフロッピーディスク等の電子媒体にそのまま保存しているケースも多く見られる。周知のようにパソコンやワープロの機種が現在のハードやソフト、OS（オペレーティングシステム、以下同）に対応していないため、今後読み込めないことがしばしばあるので注意が必要となる。

教会事務室で保存していない過去の教会資料の収集は、信徒が所蔵している資料に頼らざるを得ない。信徒によっては、過去の教会資料を個人的に整理している方もおられるので、長い期間役員をされた信徒を中心に資料の供出を呼びかけてみたい。その際に「総会資料」や各種行事のリーフレット、「週報」、「礼拝次第」といった教会が発行した記録だけでなく、個人的に撮影した写真や説教記録等もあれば借用し、コピーや写真撮影による複製資料を作成しておくことが肝要である。

このほか、教会によっては母教団の本部や関係する教派の大学図書館・研究機関等に古い資料が残されていることがある。また、地域の博物館や資料館、図書館の郷土資料室といった資料保存施設には、地域資料として撮影された教会の古い写真や新聞等が所蔵されている可能性がある。自治体の公文書館には、教会設立に際しての許認可申請等に関する行政文書が保存されており、複写利用することが可能であることから大いに利用されたい。

では実際に資料を集めるにはどのようにしたらよいのか。一つは、教会アーカイブズを管理してきた牧師や役員、事務員の方にその所在場所を確認する。次に、個人の所蔵資料については、信徒へのアンケートや週報を通じて資料の供出を呼びかけます。牧師や信徒は異動していることもあるので、異動先の関係教会へ打診することも必要となろう。

ところで教会資料は、教会関係の文書記録といった一次資料だけではない。それらが残っ

ていない場合は空白の期間ができてしまい、教会全体の歴史を紡ぐことができない。そこで、その時代の記憶を当事者にインタビューして記録する、いわゆる聞き取り調査（オーラルヒストリー）が重要な調査手段となる。その際にあらかじめ質問事項を決めておくことが大事であるとともにインタビューは一人だけに実施するのではなく、同世代の方を対象に複数人を行うことで、一個人の記憶から複数人の記憶=記録へと確定していくことができる。

最後に教会資料の基本データ（戸籍簿）となる調査カードを作成する。調査カードには、調査年月日・調査内容等を記録し、カードの裏には、資料の保管場所の状況や資料の現状写真を撮影してプリントし、貼付しておく。この調査カードには、今後の資料所蔵者の連絡先等、個人情報も記録するので、管理は、牧師や役員等責任ある立場の方が行うのが望ましい。

以上、簡単ではあるが教会資料の集め方と作り方を紹介した。まずは、できることから始めたい。教会アーカイブズを後世に伝えることで新たな教会の歴史が皆さん的手によってつなげられることになる。

おわりに 一教会アーカイブズをどのように守り伝えていくのか?—

教会アーカイブズ(歴史資料)を守り伝えるのは、まさしく「人」である。近年、そのための専門職であるアーキビスト制度もようやく整いつつあるが、現場での配置を含め課題も多いのが現実である。最後に、次の二ことばを掲げて本要旨を閉じたい。

「隠れているもので、あらわにされないものではなく、秘められたもので、明らかにされないものはありません (マルコ4：22)

まさに、昨今の記録管理の在り方を鑑みた時、アーカイブズの本質を捉えた聖句だと感じるのは私だけだろうか。

【参考文献】

- (1) 東京基督教教大学アーカイブズ研究会編・山口陽一鈴江栄一・杉浦秀典・阿部伊作・新井浩文著『教会アーカイブズ入門』(いのちのことば社、2010年)
- (2) 拙稿「教会の記録を残そう『教会アーカイブズ入門』のススメ」(『いのちのことば』2012年3月号)
- (3) 拙稿「教会資料の集め方と作り方」(『信徒の友』1月号、2024年)
- (4) 拙著『文書館のしごと—アーキビストと史料保存—』(吉川弘文館、2024年)
- (5) 『宮代町史』通史編(2002年、宮代町)、
- (6) 三羽善次『和戸教会百二十五年史』(日本基督教団和戸教会、2005年)
- (7) 平成14年度特別展図録『和戸教会と日本の近代化を支えた人々』(宮代町郷土資料館、2002年)

聖書翻訳と漢字、漢文

氏名 金井重彦

日本では、江戸時代から明治 5 年まではキリスト教は禁教であった。これは周知の事実である。

しかし乍ら、一部の知識人の間で聖書は少なくとも幕末には読まれていた。本居宣長の死後の弟子と称した国学者・平田篤胤の著書にもその形跡が見られることは知られている。儒者にとっては儒教の天とキリスト教の天との関係の考察が行われていた（金沢正志斎『豈好辨』）。少なくとも知識について、わが国は「鎖国」などしておらず、西洋の新知識は幕府の蛮書取調方をはじめ、各藩で蘭学として攝取されていた。また清国で出版された漢文訳書を通じて広く読まれていた。

聖書については、江戸時代の知識人の共通言語であった「漢文」訳を通じて蘭学者以外にも読まれていたことは、平田篤胤の例からも伺える。平田篤胤は、漢文は自在に読めたがヨーロッパ言語を原書で読める能力はなかったと思われる。

幕末から明治初期にかけて欧米の各ミッションは日本への布教に手ぐすねを引いていたと思われる。

この布教に不可欠なツールが「聖書」である。

聖書の翻訳には海老沢有道をはじめとする重厚な先行研究が十分にあるが、ここでは翻訳上の用語の創造について正教会約新約聖書を通じて考察したい。

聖書は清国では翻訳されており、清国の「漢訳」（文語文・古典文訳）聖書から訳語を継承したことが少なくない。またわが国では訓点付きの漢文訳聖書も出版されていた。

漢文訓読調の翻訳は、莊重さがあり知識人に受け入れやすかったと思われる。

清朝に翻訳された新約聖書の漢字・漢字熟語による聖書の訳語に対して、違和感を覚えて独自に訳語を作ろうとした試みとして、ニコライ=中井木菟麻呂の正教会版新約聖書の翻訳がある。中井木菟麻呂は大阪における懐徳堂（大阪大学の文化系学部の前身）という塾の正当な儒者の家系に生まれた儒者で、明治 7 年洗礼を受けた敬虔な正教徒であると同時に懐徳堂再建を試み奮闘した儒者として生涯を全うした正教徒である。

ニコライ=中井訳は、安易に清国の漢訳の既成の訳語に頼らず、既存の漢訳語に根源的疑問を持ち、独自の「神〇」（しん）などの訳語を創造した。訳語は一つ単語に一つの漢字をあてるというやり方であった。漢字二文字を組み合わせて訳語をつくるという明治期日本の独特の生き方とは別の道を選んでいるが、まさに正統な漢学者らしいやりかたである。

なお、正教会約新約聖書がロシア語からの重訳であるという風説は誤りである。人名等の読みがロシア語風というのも誤解で、コイネーの現代ギリシャ読み（ロシアでの読み方）によっているので、結果的にロシア語訳聖書と読みが近時しているのが真相である。

非常に現代人には文語文としても読みにくい文語文であるが、翻訳の厳格さから、これをもとに口語訳化することはおそらく不可能であろう。

植木枝盛の「天」とキリスト教

氏名 服部直美
所属 東京大学大学院博士課程

明治初期の自由民権運動家・植木枝盛（うえき・えもり）は、現行憲法がGHQの押し付けではないという文脈でしばしば言及されるようになったことで、近年急速に知名度が高まり、教科書にも載るほどとなった。しかし、植木は若くして亡くなり長い間忘れ去られていたため、他の自由民権運動家たちに比べて先行研究が少ない。植木に関する研究は、家永三郎『植木枝盛研究』（1960年）によって研究の基盤ができ、米原謙『植木枝盛：民権青年の自我表現』（1992年）によって植木の評価がある程度定まったとみることができる。だがこれらの研究は、もっぱら日本思想史の観点から植木の人物像や思想を考察したものであり、植木とキリスト教の関りや、キリスト教から受けた影響については限定的・一時的なものであったと判断されている。一方、森島豊『抵抗権と人権の思想史：欧米型と天皇型の攻防』（2020年）においては、植木が「自分たちの自由民権運動がプロテスタンティズムの信仰に基づいていることを自覚し」てキリスト教に関心を示して教会に通い、「キリスト教の自由の精神の必要性を主張し」たと解されている。

こうした研究動向をふまえて、改めて植木とキリスト教の関係を文献資料に基づいて捉え直そうとするのが本研究の目的である。植木が明治初期の数年間、教会に行って説教を聞き、『天道溯原』など数多くのキリスト教書籍を読んでいたことは、日記等から判明している。だがその後、教会に行くのをやめ、キリスト教を批判するようになる。そして晩年には、自分は耶蘇に等しい者であると放言するようになる。こうした変化が何を意味するのかを正確に捉えるためには、植木の思想的変遷の背景を知る必要がある。また、植木への評価を一旦おいて、資料に立ち返って検討する必要がある。

そこで、鍵となる観念として「天」に着目する。植木は生涯にわたり「天」という言葉を使っているが、中国の「天」観念は日本に受容される過程で変容し、日本型の「天」として定着した。この「天」観念とキリスト教の「上帝」、そして「耶蘇」が植木の中でどのように位置づけられたかを考察することで、植木とキリスト教の思想的関係を、捉え返すことができると言えている。

本研究が従来の研究と異なる点は、考察の新たな視点として、キリスト教の視点を導入するところにある。従来は日本思想史の観点から、あるいは自由民権思想という観点から考察されてきた。そのため、キリスト教に関して通り一遍の解釈が施されたり、キリスト教の影響が大きいものと指定されたりしてきた面が否定できない。また、従来の研究では自由民権運動や自由民権思想がメインとなり、植木の宗教的な側面はサブに置かれていた。本研究は、こうした先行研究の限界を乗り越えるものとして、「植木枝盛の「天」とキリスト教」というテーマを提示して論じる。

イエズス会インド副管区長 G・バルゼウ宛 F・ザビエルの最終メッセージ

氏名 岸野久

今回取り上げるのは、ザビエルの絶筆となった 1552 年 11 月 13 日付上川(島)発 F・ペレス及び G・バルゼウ宛書翰の最終部分である。前半部分に「ガスパル師よ、私がそちらを出発する時に書き残しておいた覚書及び、(その後)あなたに記しておいたことを思い出してください。決して忘れてはなりません。」とある。すなわち、すでに与えられた覚書及びその後の指示を遵守し、副管区長としての任務を全うするように、という内容である。後半部分には、その完遂のために念を押すような形で「このことをあなたに思い起させるのは、あなたが忘れずにいるとするならば、かつてあなたが行ったようにあなたの考え *vosso parecer* を実行しないようにするためです。あなたの行いがどれほど正しかったか、神はご存じです。来年、もし私がそちら(ゴア)へ行って糺さなければならないようなことを見つけたら、私は無念に思うことでしょう。」とある。つまり、過去にあったように「あなたの考え」に基づいた、自分勝手な行動を慎むように、という勧告である。中国入国目前のザビエルが懸念した「あなた(バルゼウ)の考え」とは、一体何であったのであろうか。この事柄は 16 世紀から今日に至る諸ザビエル伝や研究において話題にされることなく、不明のままとなっている。その理由は、第 1 に、ザビエルのことはザビエル書翰に語らせる、つまり、書翰に記されていないことはあえて誼索しない、という研究者の姿勢にあると思われる。第 2 に、これまでバルゼウ自体の実証的研究がほとんど存在しないこと、である。後者に関して、私は 9 年前に出版した『ザビエルと東アジア—パイオニアとしての任務と軌跡—』(2015 年)においてバルゼウの「中国プロジェクト」について明らかにしたことがある。これに近著『中国を目指すザビエル—上川島での活動と崇敬の端緒—』(2024 年)の成果を加え、ザビエルが生涯の最後に何を思い、願ったのか解明してみたい。

オスマン帝国占領下におけるハンガリー宗教改革者セゲディの働きについての 一考察

氏名 伊勢田奈緒

セゲディ・キス・イシュトヴァン (Szegedi Kis István : 1505–1572) は、かの著名な神学者カール・バルトがハンガリーの宗教改革の歴史に関する講義を準備する際に、最初にセゲディの学術的神学著作を求めたとされる程、ハンガリー宗教改革にとって重要な人物と評価できる。にもかかわらず、不思議なことに現在刊行の『キリスト教大事典』(改訂新版)にも『キリスト教人名辞典』にも彼に関する項目はない。併せて日本では今のところ彼についての研究はなされていない。

周知の事であると思われるが 1555 年のアウグスブルク宗教和議によって「領土が属するところの者に宗教も属する」 (cuius regio, eius religio 「ひとりの支配者のいるところ、ひとつ宗教) が原則とされ、領邦教会制の基盤が形成されていったが、この原則は限界があったことに改めて気づかされる。すなわち、神聖ローマ帝国に属していたハンガリーは 1526 年、モハーチの戦いでオスマン軍に敗れ、さらに 1541 年にはスレイマン一世がハンガリーを攻撃し、ブダを支配下に治め、その結果、オスマン帝国の直轄領、オスマン帝国の保護下の自治領となったトランシルヴァニア、そしてはハプスブルク家の継承するハンガリー王国と、三分割となり、現実問題としてこの原則は全ハンガリーでは成り立つのは困難であった。

今回の発表では、この原則が成立した頃に、トルコ帝国支配下におかれていた領内で、数々の妨害に遭いながらも説教者として巡回し、領内の監督者として新たな教会を作るために教会制度を整え、また、将来の牧師を育てるために教育者として務め、さらに多くの教会会議において神学論争をし、異端と闘いつつ、当時のヨーロッパの神学生に読まれたという多くの神学書を執筆し、と身を粉にして働いたセゲディについて考察する。彼は当時、宗教改革思想の中心のひとつであったクラクフで学んだが、この頃、福音主義的な思想をもったと考えられる。1543 年にヴィッテンベルクで学び、神学博士号を取得したが、同年、彼の故郷セゲド (チャナード郡) はトルコ支配下となっていた。彼は 1544 年にチャナードに帰国し直ちにその地で宗教改革をスタートさせ、亡くなるまで福音宣教のために活動した。発表の中心は、彼がヴィッテンベルクで学んだ直後、ハンガリー人の領主貴族が逃亡し、オスマン帝国の制度がしかれ、住民にイスラム教への帰依を迫るという故郷へ戻り、何度も投獄や迫害を受けるような身の危険にさらされるつらい思いをしながらも、人々に福音を伝えようとした彼の動向を見ることがある。また、彼はカトリック信仰から福音主義へ回心したが、はじめはルター主義であったのにもかかわらず、スイス改革派を支持し、その教義を取り入れていったことについて見ながら、併せて、彼が特に反三位一体論に対して、活発に論争した理由についても考察していきたい。

パドヴァ大学におけるテューダー朝期英国人国民団と対抗宗教改革 ——レジナルド・ポールを中心に——

氏名 石川雄一

所属 上智大学中世思想研究所

メアリ 1 世(Mary I)のカトリック復興で活躍した神学者の多くや司教のほとんどは、その中心人物であったレジナルド・ポール(Reginald Pole)を含めて英国のオックスフォードやケンブリッジ大学で教育を受けた人文学者たちであった。これら両大学における人的・知的交流がメアリ 1 世時代のカトリック刷新における思潮を形成したといえるが、大陸に留学していた英国人たちの人的・知的交流が及ぼした影響についてはこれまで軽視されてきた。だが、英国の大学における人文学の伝統が、パドヴァ大学に留学していたリナカー(Thomas Linacre)やラティマー(William Latimer)により育まれ、同大学で学んだポールやタンストール(Cuthbert Tunstall)が英国対抗宗教改革思想の発展に寄与したことを鑑みれば、パドヴァ大学留学生が英国のカトリック刷新に与えた影響を軽んじることはできないだろう。

1222 年にボローニャ大学から分離独立する形で誕生したパドヴァ大学は、中世以来ヨーロッパにおける人文学の中心地の一つであり、大陸の対抗宗教改革で活躍する教会人を数多く輩出した。そこには各国から集まった留学生たちが国際的な交流をしていたが、他方ににおいて「国民団」(natio)と呼ばれる同郷集団による同郷人の結びつきも強かった。こうしたパドヴァ大学における国際および同郷の人的・知的交流が、大陸における対抗宗教改革の思想を英国人留学生に伝え、そしてメアリ 1 世時代のカトリック復興に影響を与えたと考えられる。

パドヴァ大学に留学した司教の数こそ 2 人と少ないが、高位聖職者以外の教会人や神学者では重要な人物が目立つ。1520 年代後半にジョン・フィッシャー(John Fisher)と聖書翻訳に関する論争を展開したリチャード・ペイス(Richard Pace)、レジナルド・ポールの学友トマス・スターキー(Thomas Starkey)とトマス・ラプセット(Thomas Lupset)、また、メアリ 1 世の宮廷司祭であったジョン・エンジェル(John Angel)もパドヴァ大学で学んだとされる。

パドヴァ大学におけるテューダー朝期英国人国民団に関するプロソポグラフィ研究はジョン・ウールフソン(Jonathan Woolfson)によってなされたが、彼の主たる関心は自然科学と人文学に寄せられており神学の重要性は認められていないかった。本研究ではウールフソンが軽視したテューダー朝期のパドヴァ大学における英国人留学生が、メアリ 1 世時代のカトリック復興に与えた影響について検討する。その際、特にポールを中心とした人的・知的交流を探ることで、これまで見逃されてきたメアリ 1 世時代の英国カトリック神学者に光を当て、パドヴァ大学が後のドゥエーやローマにおける英国カトリック者の学院の先駆的役割を果たしたことを示す。

カンバーランド長老教会の紀州伝道と信徒伝道者大石余平について

氏名 阿部伊作
所属 東京基督教大学図書館

当発表では、和歌山における明治中期のカンバーランド長老教会の伝道活動を取り上げ、とりわけ協力した信徒伝道者たちに着目し、その伝道の特徴を明らかにすることを試みる。従来の研究では、同長老教会の紀州伝道は、ヘール宣教師兄弟の活動に重きが置かれ、個々の人物については各個教会史などで周辺的な記述がなされてきたが、同長老教会の宣教指針には「日本人による伝道」が掲げられており、信徒伝道者の育成とその実について、各活動を俯瞰的に捉えることで見えてくる意義と特性を明らかにすることを目的とする。

従来、明治初期から中期におけるプロテスタントキリスト教の諸相は、「文明の宗教」として士族層での受容展開など都市部に重きが置かれ研究がされてきた。地方における基督教受容と地域商人たちの活動については、群馬や岡山などでの研究がなされているが、その信徒の伝道者としての研究は少ない。当発表では、和歌山田辺で結成された平信徒伝道団の中で、特に大石余平と山内量平を取り上げ、併せて、ヘールによる日本人伝道者協力者養成に触れ、田辺教会記念誌における「紀南バント」と表現される一連の活動の展開を、地域的背景と当時の社会動性を踏まえつつ、地域資料より考察する。

大石余平（1854-1891）は、和歌山県新宮出身で、カンバーランド長老教会派遣のヘール兄弟宣教師が紀伊半島へ伝道旅行を行った際の1883年、信徒伝道者山本周作に導かれA・D・ヘールより洗礼を受けた。以後、余平はJ・B・ヘールに協力し紀州・大和地方の伝道旅行を行った。それらの中で友人山内量平とその家族、また余平の家族が洗礼に導かれた。その後、余平は土地を提供し教会堂を竣工、新宮教會長老に選ばれた。85年には山内量平、久世徳藏、山本周作、和佐恒也らと共に田辺で平信徒伝道団を結成した。87年、一家で、奈良県下北山村の西村家に移り、会堂を建てるなど伝道した。88年、その活動がもとで後見人を辞任、新宮の生家に戻る。材木を扱う「光塩社」を教員と共に共同経営、新宮が洪水に見舞われ、災害活動を行う。翌年には、伊勢熱田に移り、熱田神社の鳥居前に居住し講義所の看板を掲げ伝道。岐阜での亜炭採掘事業を始める。また、上京し「紀伊友愛会」（県人親睦会）を山内量平らと結成し、同会で聖書を配った。その会には陸奥宗光も参加した。愛知教会伝道師として、名古屋英和学校（現名古屋学院大学）に語学と宗教の教員として着任したが、名古屋英和学校チャペルでの連合早天祈祷会出席中に濃尾地震に遭い余平・ふゆ夫婦は召天、38歳でその生涯を閉じた。弟に玉置西久、大石誠之助、長男に西村伊作がいた。

余平については、ヘール宣教師兄弟の記録、大石誠之助（大逆事件で死刑）の兄として、西村伊作（文化学院設立）の父としての回想記はあるが、信徒伝道者としてのまとめた考察はなされていない。

「大正デモクラシー」と「戦後民主主義」をつなぐ人々 —鈴木義男と三淵忠彦、片山哲ら—

氏名 雲然祥子

所属 岩手県立大学

本報告の目的は、鈴木義男（1894-1963）を取り上げ、彼がソーシャル・リベラル（社会民主主義）の思想をどのように修得し、それを戦後日本にどのように継承し、定着・浸透を図ったのかを、主に鈴木の周辺の人々との関わりの中から検討し、「大正デモクラシー」と「戦後民主主義」をつなぐ人々の歴史的な役割の大きさを明らかにすることである。

報告者は以前、クリスチャンであり、近代・現代の日本で大学教授・弁護士・政治家として活躍した鈴木を「大正デモクラシー」と「戦後民主主義」をつなぐ人物として注目し、吉野作造との関連を中心に検討を試みた。鈴木は、吉野の「高弟」と目され、吉野から継承した社会民主主義の思想や行動に大きな影響を受けていたほか、幼少期からのキリスト教的人道主義に基づく思想・行動も相まって、民主社会主義を実践していた人物でもあった。彼は、戦前までの経験を活かし、日本国憲法の条文作成・審議を通して「大正デモクラシー」と「戦後民主主義」をつないだと考えられる。

今回の報告では、鈴木に関わる人物として三淵忠彦（最高裁判所初代長官）や片山哲（第46代内閣総理大臣）らを取り上げる。彼らは吉野作造らとも親交があり、鈴木とはまた異なるかたちで「大正デモクラシー」の思想と行動を継承・実践した人々であると考えられる。中でも片山哲はクリスチャンであり、吉野・鈴木とも深い親交があったと考えられる。

そこで本報告では、従来の研究ではほとんど用いられず、報告者が近年発見・収集した新たな資料を手がかりとして、鈴木と彼らとの関係について検討するとともに、彼らが果たした役割がどのようなものであったのかを考察するとともに、そこからみえるソーシャル・リベラルの様相などについても考察を行う。

メリノール宣教会（Catholic Foreign Mission Society of America）の日本宣教とカトリック京都知牧区（Prefecture Apostolic of Kyoto）の設立について

氏名 宮崎善信
所属 長崎外国語大学

教皇庁布教聖省は1937年、大阪教区から京都府、滋賀県、三重県、奈良県を分割して京都知牧区を設立し、メリノール宣教会に委託した。知牧区の長である知牧にはパトリック・バーン（Patrick Byrne）神父が任命された。1940年にはバーン神父に代わって古屋義之神父が知牧となったが、戦後、1951年に京都知牧区が司教区に昇格されたことをうけ、古屋神父が初代の京都教区司教に叙階された。その後、1976年に田中健一司教、1997年に大塚喜直司教が任命され現在に至っている。

京都知牧区を委託されたメリノール宣教会は1911年に創立された。創立者は、ボストン大司教区司祭 J.A. ウォルシュとノース・カロライナ州のローリー（Raleigh）教区司祭プライス。彼らは1911年6月にローマで教皇ピウス10世から認可を受け、帰国後、ニューヨーク市の郊外にハドソン川を見下ろす丘をみつけ、これを「メリノール」（Maryknoll マリアの丘）と名づけた。そして、そこに神学校を設立して神学生と修道士の志願者を募ったのが、会の始まりである（以上、『新カトリック大事典』第4巻）。創立者のウォルシュは、1917年から翌年にかけて宣教地を調査するため日本、朝鮮、満州、中国を視察した。その結果、1918年、中国南部の広東省に創立者のプライスと3人の若い宣教師が派遣され、同会による海外宣教事業が開始された。その後、1923年に日本統治下にあった朝鮮の平安道、そして1925年に満州にそれぞれ宣教師を派遣した。

一方、日本宣教に関しては、メリノール宣教会は早くも1920年代に米国西海岸の日本人移民に対する司牧に取り組んでいた。これは、将来における日本本土での宣教を見越したことであった。そして、1934年、バーン神父が日本上長に任命され日本に赴任することになった。ところが、その後、日米対立や日本当局によるカトリックに対する抑圧政策、それをうけての布教聖省や駐日教皇使節マレラ大司教の意向、さらには大阪教区を管轄するパリ外国宣教会のカスタニエ司教の方針転換などが錯綜したため、京都知牧区の設立までは多くの紆余曲折を経なければならなかった。

ところで、これまでメリノール宣教会による日本宣教、特に京都知牧区の設立に至る経緯については本格的な研究はほとんどなされていない。この現状をふまえ、本発表では主としてメリノール宣教会側の史料、すなわちメリノール宣教会本部の文書館（archives）に所蔵されている会員の書簡や報告書、会議録等を活用して明らかにしたい。

布施辰治のキリスト教 1939年を軸として

氏名 川上直哉

所属 仙台白百合女子大学カトリック研究所

1. 本研究のテーマとモチーフ

布施辰治は1880年に現在の石巻市蛇田で生まれ、1953年に死去した。弁護士として活躍し、特に朝鮮半島出身の人々の弁護人としての活躍が知られ、2004年に韓国政府によって建国勲章を授与されている。

布施辰治は、その青年期に洗礼を受け、終生「キリスト者」として生きた。しかし、その内実についての解説は、まだなされていない。本研究はこの解説に取り組む。本発表はその前半部分となる。

布施辰治は教会を出た。そのような「キリスト者」は、日本に多い。こうした「囲いの外の羊（ヨハネ福音書10:16）のイメージ」を念頭に歴史的研究を行い、日本のキリスト教の全体を捉える。ここに、この研究の第一のモチーフがある。

布施辰治はハリストス正教（本研究では意識してこの語を用いる）の洗礼を受けた。約500年前の拡大期から現代へ、日本のキリスト教史はまだ、充分に接続していない。とりわけ東北においては、その断絶は顕著である。本研究はその歴史をつなぐ。ここに、この研究の第二のモチーフがある。

本研究は、布施辰治のキリスト教を検討することにより、日本におけるキリスト教とは何であるか・その課題とは何であるかを解説することを目指す。その準備として、本発表は1939年の前後を辿り、布施辰治の思想と実践を明らかにする。

2. 本発表の位置と方法

本発表は、本研究の前半部分となる。本発表を基盤に、本研究の後半として、戯曲草稿『弁護』を解説する。この解説は、過去の研究において為されていない。

本研究全体の中軸は、1939年6月から1940年7月に置かれる。この間、布施辰治はその身を獄中に置いた。そして、その獄中で戯曲草稿『弁護』を著した。この草稿は、布施辰治のキリスト教理解を知る上で重要な意味を持つ。

1929年、布施辰治は救世軍との連携を公示している。1930年、布施辰治自身の神学から法学への転身が評伝として公開されている。そして1931年、布施辰治は自身の宗教批判を確立させた。

1939年からの400日の在監中、救世軍の山室軍平との交流の中でイエス伝の構想がまとまり、布施辰治は草稿『戯曲』を著す。また、入獄中の教説によって、聖書の理解と信仰の内実を言語化し、獄中の『レ・ミゼラブル』読書によって、その宗教実践の具体的イメージを定める。

非転向を貫いた上で恩赦により出獄した布施辰治は、少なくとも1944年9月まで、獄中で獲得した思想の具体的な展開を、多くの論稿の中で披瀝した。それは近衛内閣以来の「大政翼賛」新体制への徹底的な職域奉仕によって具体化されるべきものとされた。1945年以後、自身の生涯を回顧する布施の言葉と、この時期の布施の言説との間の奇妙な矛盾は、本人においてはおそらく感知されていない。

以上について、本発表は、主に雑誌『廓清』を辿って明らかにする。この点も従来の研究にない方法となる。

ファシズム体制下のプロテスタント教会 ～ワルド福音教会の動向を中心に～

氏名 金田俊郎
所属 福岡女学院看護大学

前回発表では、アッシジのフランチェスコ（1181/2-1226）の平和的宣教において、十字軍戦下のエジプト遠征以降、それまでの戦争前提の「殉教」志向の宣教から、具体的な「平和勧告」宣教へとシフトしていった経緯に注目した。そのフランチェスコは今日イタリア共和国の守護聖人とされるが、推挙されたのは1939年、当時のファシスト政権下であった。背景にはファシスト政権とローマ教皇庁の間で1929年に締結されたラテラーノ協定の影響が考えられるが、ムッソリーニ自身もフランチェスコのヒューマニズムを称賛したという。その真意がどこにあるかは不明だが、こうした事実においても、教会と国家体制や戦争との複雑な関係を考えざるを得ない課題がある。昨今いわゆる右派ポピュリズム台頭を背景に、イタリアでもネオ・ファシストを標榜する首相が政権につくようになっている。このような状況下でふたたび教会は、国家体制や戦争との関係を問われる時代に至っている。

第二次世界大戦の戦前および戦下における教会の動向についてわが国では、「日本基督教団」成立やその戦争協力について、あるいは告白教会の抵抗運動に象徴される「ドイツ教会闘争」についてなど、主にプロテスタント教会のそれが詳細に研究されてきている。一方イタリアについては、教皇庁のファシスト政権との結びつきやナチスドイツとの交渉といったカトリック教会の動向には注目されるが、プロテスタント教会についてはこれまでほとんど取り上げられていない。そこで、ファシズム時代のプロテスタント教会の動向に関する情報を集め、ドイツや日本におけるそれとの比較を通して、改めて教会の国家体制や戦争に対する姿勢について考察することにした。

イタリアのプロテスタント教会は、中世に異端とされつつフランチェスコに先立って清貧運動を展開し、宗教改革後にプロテスタントに合流したワルド派に起源をもつワルド福音教会 Chiesa Evangelica Valdese をはじめとし、19世紀以降の外国宣教によって成立したメソジスト教会やバプテスト教会などを加えた諸教派より構成される。当然ながらイタリアにおいては少数派であるが、それだけカトリック教会とは異なる境遇にあり、また異なる視点から状況を見る立場にあった。また少数派という点のみに限れば、むしろ多数派であったドイツの領邦教会などより、わが国の教会の置かれた状況に近いとも言える。そのようなプロテスタント教会が、ファシスト体制下において、どのように宣教をすすめ、政治体制に対してどのように応答したか。また戦時下の状況にどのように対応したのかに注目したい。

使用できる資料は今のところ、ワルド福音教会の出版物やホームページ上の情報などに限られているが、可能な限りの情報を集めて考察を深めたい。

アメリカン・ボード対日宣教の「始まり」を再考する —カントン・ミッションの「実践」と「頓挫」—

氏名 蘇哲誠

所属 同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科

1868年、アメリカン・ボードは当時の北京駐在宣教師ヘンリー・ブロージェの要請に応じ、翌年にD・C・グリーンを日本に派遣し、日本ミッションを成立した。一般的に、グリーンが横浜に到着した1869年はアメリカン・ボードの日本ミッションの始まりであると考えられている。ところが、アメリカ最古の海外宣教組織であるアメリカン・ボードのカントン・ミッションは早くも1837年「モリソン号事件」の日本人漂流民送還の失敗後、すぐに漂流民をミッションの印刷所に引き受け、アメリカン・ボード本部に日本ミッション設立の必要性を訴えた。当時は宣教師補助であるS・W・ウィリアムズを中心に、日本語・日本文化の学習、日本語聖書の翻訳、聖書印刷するための日本語活字の铸造などの活動を進めており、日本ミッションが成立される以前にすでに對日予備宣教を遂行していた。とはいえ、アメリカン・ボード本部はカントン・ミッションの対日宣教計画を支持せずのみならず、ウィリアムズがペリー来航の際に首席通訳官として実った成果を得られたにもかかわらず、1860年代までに日本ミッションの設立に消極的な態度を保っていた。これまでのアメリカン・ボード研究ないし日本キリスト教史研究においては、ウィリアムズの対日予備宣教に言及したものもあるが、最初にアジア宣教を始まり、しかも最初に日本と関わっていたアメリカ海外宣教組織であるアメリカン・ボードが何故日本宣教においてアメリカの長老会、聖公会、オランダ改革派などの海外宣教教会よりも日本宣教の開始が遅れた理由について、この問題に関する研究はまだ不足している。本研究はアメリカン・ボードの対日宣教の「始まり」を再考するため、「アメリカン・ボード文書」と「S・W・ウィリアムズ家族文書」所蔵の往復書簡を用いて、まず、1837年「モリソン号事件」前後におけるアメリカン・ボード所属のウィリアムズの対日予備宣教を説明し、その意義と成果を論じる。次に、アメリカン・ボード本部が当時直面している「アメリカ国内の内部原因」と「海外宣教地の外部原因」という問題を分析し、カントン・ミッションが提唱した日本ミッションの開設に対する本部の姿勢を説明する。更に、ペリー来航から1858年の安政条約までにおけるアメリカン・ボード本部の日本開国と日本宣教に対する態度を議論し、1869年までにアメリカン・ボードが日本ミッションを開設しなかった理由について論じる。最後に、上述の討論を通じて、幕末期におけるアメリカン・ボードと米国プロテスタントの日本宣教活動の関係の一端を検討することで、日本キリスト教史における海外宣教組織の位置付けと問題点を再考する。

19世紀に消滅した正統的キリスト教靈性における正統的グノーシスの確認 —現行日本の「教育の目的」を「人格の完成」とした田中耕太郎の「完成した 人格は、「神の類像」である」の意味を追って

氏名 山崎あすか

所属 清泉女子大学大学院人文科学研究科人文学専攻（キリスト教思想）

田中耕太郎（1890-1974）は、「教育基本法」（1947年3月31日公布・即日施行）の第一条「教育の目的」を「人格の完成」とすることに拘り、先輩、後輩、教え子の言わばチーム田中の絆により実現させた。田中の「人格の完成」思想はどこから来たのだろうか。それは大正人格主義でもなく、1936年45歳頃に妻や矢部貞治と共に対面したジャック・マリタンの人格主義でもなく、ほか同時代に数多存在した人格主義からでもなかった。それは欧米留学中（1919年7月-1922年6月）の1921年頃パリの古書店でみつけた J.-B. Séverac 「Vladimir Soloviev」（Les grands philosophes français et étrangers）（Louis-Michaud, Paris、1910年）のその人、ロシア正教からカトリックに転宗したと見なされていたウラジーミル・ソロヴィヨフ（1853-1900）の影響だった。ソロヴィヨフは1883年「大論争とキリスト教政治」の中で、「異端も、回教も、その本質は結局、非人格神という点にある」と書き、キリスト教全体を「人格」概念を用い思索していた。田中30歳頃に出会ったソロヴィヨフの「人格」概念は、55歳頃の文部行政、その後の文部大臣、参議院議員時代に生かされ、最高裁判所長官時代の1958年1月、67歳の田中は『心』誌に「個性と人格とくに教育に関連して」を発表し、「完成した人格は、「神の類像」である。」と書いた。

田中は「カトリックへの改宗も実はソロヴィヨフに負うところが多かつたことを告白する。」と書いている（「ヴラヂミル・ソロヴィヨフの生涯と思想（一）」『世界』1948年9月）。田中の「ソロヴィヨフの法哲学」（日本法哲学会『法哲学四季報』第1号、朝倉書店、1948年11月）や、再独立後の論争のため当時注目された『教育基本法の理論』（有斐閣、1961年）からは田中の道徳論の支柱がソロヴィヨフ晩年の大著『善の基礎づけ』であることが分かる。田中は1974年83歳で亡くなる直前までソロヴィヨフを研究したいと書いていた。『善の基礎づけ』はソロヴィヨフがカトリックに最接近すると同時にフランス・イエズス会から最も攻撃された人生年表の最重要期=1888年よりも後、「ソフィヤ」追究期の1894-1896、-99年に書かれた。

田中の尊敬する師の一人は、新渡戸稻造だった。田中は一高校長兼倫理教員であった新渡戸の「人格教育」を体験、また、国際連盟事務次長時の新渡戸のもとに2週間以上宿泊して毎晩語り合った。新渡戸と田中の思想の共通点は「原罪」概念がないとみえる点である。ロシア正教には償いを求めるような原罪概念はない。

神学者ルイ・ブイエは、19世紀が正統的キリスト教靈性における正統的グノーシス、「眞のグノーシス」という主題の存在をなくし異質なものとしたと書き（『キリスト教神秘思想史 I』上智大学中世思想研究所、1996年、原著初版1960-65年）、「十九世紀に根拠なしに立てられた学説に今なお従っている人々」を批判している（『新約聖書におけるキリスト教の源流』（南窓社、1982年、原著1966年）。

本発表では一歩深め、ブイエのいうキリスト教の眞のグノーシスまでを確認する。

ヒンチマンの平和思想 —アメリカ・キリスト教宣教師（バプテスト）の活動から

氏名 原真由美

所属 関東学院大学

ヒンチマン William Lee Hinchman はドイツ系移民のアメリカ・バプテストの宣教師であるが、アメリカ政府はメノナイト派やフレンド派、ブレズレン派などの特定の宗派のみに兵役拒否を認めていたが、当時ヒンチマンはバプテスト派として兵役拒否の許可を得ている特異な存在であった。

太平洋戦争後、アキスリングを始めとして日本の復興状況を調査したアメリカ・バプテストのフリーデール、ヒンチマンと 3 人の宣教師が来日し主事を務めていたが、引退宣教師であったがアキスリングが特例として太平洋戦争後も日本で活動していた後に帰国し、戦後の復興方針をまかされたフリーデールも任務を終わり帰国していった。ヒンチマンは、その後を引き継ぎ冷戦の起こる 1950~1963 年の 13 年間、戦後の日本でのアメリカ・バプテスト宣教師主事としてバプテストの宣教師を取りまとめている。アメリカ・バプテストの日本での宣教の方向性を決定することから実施する重要な位置で働きを行ったのはヒンチマンであった。また、ヒンチマンは関東学院大学の土地を購入し、キャンパスを拡大するなど設立にも関わり、後に関東学院の監事、院長となっている。

しかし、戦後の日本でヒンチマンはアメリカの対日宣教政策とアメリカ・バプテストの宣教方針と相まってどのような理念からその宣教の方針や活動が行われるようになったのかは明らかではない。また戦後の宣教師主事としての働きや平和思想についての研究については触れられていない。

本稿では彼の自伝やアメリカ・バプテストの年次報告書を中心として関東学院の機関誌宣教師カードから出自（ドイツ系アメリカ人としての問い合わせ）や兵役拒否にいたる平和への思い、そしてその理念の形成と日本での宣教師主事の働きから感じた宗教と政治の問題（政教分離）、具現化した働きについて考察することで、ヒンチマンの兄弟愛を根底におく平和思想を彼の活動から明らかに出来るのではないかと考える。

キリスト教史学会 第75回大会 研究発表要旨集

発行日 2024年9月13日

発行者 小檜山 ルイ

実行委員会委員

石川雄一・小川早百合・朱海燕・田中恵・
狭間芳樹・服部直美・松谷暉介・三好千春

発行所 キリスト教史学会

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル9F

毎日学術フォーラム内 キリスト教史学会事務局

E-mail shsc@accelight.co.jp

URL <http://shsc.jp/>